

詩 集

いのちの賦

宮坂美樹子

大宮詩人叢書

宮坂 美樹子（みやさか・みきこ）

- 1925年生まれ
- 大宮詩人会会員
- 「林道」同人
- 詩集「ひこばえ」
- 現住所 与野市本町東5-14-15

宮坂美樹子詩集 いのちの賦 〈大宮詩人叢書第3期⑬〉

平成2年2月20日発行

著 者 宮坂美樹子

発行者 宮澤章二

発行所 大宮詩人叢書刊行会

大宮市上小町209（〒331）山崎方
電 話 048-641-2717 振替 東京2-139230

編集者 山崎 馨・廣瀧 光

制 作 麗文社 大宮市三橋4-122-3
電 話 048-623-8417

印 刷 中沢印刷株式会社

定価 1,000円

詩 集

いのちの賦

宮坂美樹子

いのちの賦
目次

メロン

8

土龍のうた

10

菜の花

12

鏡

14

花彼岸

16

街

18

芋を煮る

20

桃果点心

22

くらげ

25

極楽鳥花の咲く島

28

木は倒された

30

いのちの賦

32

こぶしの花

34

「夜」という名の沼で

37

地獄絵

40

亀のはなし

42

もみじの村

44

蚕を飼う女

47

あとがき

いのちの賦

メロン

メロンが二つ

台所の板の間にかけている

色づき始めた紫陽花に 雨が重い日曜日

おとなたちのあいだに

気だるい 無責任さが 立ち止まる

孫たちは

食べごろのメロンの網目に

ジクソーパズルを組み上げ

わたしは

素直さを失って渴く手の甲

青く浮き立つ脈管のうねりに

迷路ゲームの スタートラインを探す

やがて

鳩時計の白い鳩が 素早く扉を閉じ

六枚の皿に切り分けられたメロンは

公平に 家族の食欲を満たす

土龍のうた

晚咲きの牡丹の花が崩れた

と 思ったら

庭先から 家の中へ

じわじわと蒼い影が這入りこんできた

なぜかわからぬままに わたしは

仏壇の前の暗がりに 小さく座って

息を潜めていた

暗くなつたのは

庭の三本の柿と

いくつかの実をつけた梅の老い木が

いつせいに葉を開き 枝を交わし 庇に迫り

六月の氣を吐く 緑の龍と化したから

うつうつと馨る 青葉の責め苦に

わたしは 土龍のように部屋にこもる

過って地上に迷い出た土龍は

はつ夏の太陽に目を焼かれ

光を知らない洞窟の生き物のなかには

目が痕跡だけになってしまったものもいるという

植物細胞が拒否し反射してくる

緑色の光線に射すくめられて

わたしの眼も年ごとに退化していく

菜の花

汗と脂と

子どものようなときめきに巻きあげた壺

陰干しと焼成の過程で

広い口は厚い花びらのように垂れ

丸く整えた肩は細り

たつぷりとたるんだ胴に

赤い釉薬の流された甕

乾いた額紫陽花

花の飛んだ薄の穂

茨の実

ぶ器量な壺に

晩秋を押しこめ

人目につかない物置きの棚におく

窯出しと同時に

自分の心を映しきれなかった器に

木槌を振り上げる陶工のように

わたしもこの壺を

粉みじんに砕く日を数えた だが

何昼夜か松薪の炎に抱かれた陶は

爪を当てれば涼やかに震える

健康な野の女のようにも見えてくる壺

伊豆の海辺の

まっ黄色な菜の花をひと抱え

こぼれるほどに挿したい

鏡

崩れた姿勢で鏡の前にすわる

電話口での不用意なことばの語尾が

生臭く胸元に絡みつき

急速に増殖し始める

泉の涸れた隠り沼のアメーバのように

日に焼けた皮膚の癌細胞のように

組み合わせた手の

小爪の生えぎわまで変色してくる

口紅を拭き取る

髪に手荒くブラシを当てる

鏡に深く息をかけ丁寧に磨く

拭いきれないガラスの脂粉

その奥に

遠い空が少し 映り

葉げいとうの赤が 乱れ

吐いてしまったことばを

もう一度嚙んでいる女の顔がある